

〈広報紙部門（市部）〉

特 選

「広報おおぶ」2025年12月号 大府市

◇ 審査講評

《田中審査員》

昨年の大府市の広報紙を1年分読みました。年1回の大型企画に情熱をかけているのだと理解できました。企画の主役は、あえて言えば「市民」でしょうか。フェアトレードをテーマにしながらも、住民が生き生きと暮らしている街であるというアピールを感じました。「自分もこの街に住んでみたい」と思える企画全体の構成力は秀逸です。笑顔だけではない写真使いや読む人の視線を邪魔しない色の扱い方、見出しの大きさや言葉選びなど、かなり高いレベルです。

《佐藤審査員》

冒頭の特集「やってみたいがかなうまち」における内容の質・量の充実ぶりは、圧巻の出来栄です。綿密かつ熱量のある取材、魅力的な写真、多くの文字情報を苦もなく読ませるレイアウトの技術。どれをとっても完成度の高い、特選に相応しい広報紙です。



**特 選**

「広報ひがしうら」2025年12月号 東浦町

◇ 審査講評

《田中審査員》

学校のあり方が社会の重い課題になっている中、オープン・スクールをテーマに町内の小学校を取材しました。6年生となって時間割をこなしていく紙面企画は、感情移入しやすく、楽しく読める内容でした。在学児童ではなく、卒業生に思い出を語ってもらうことで、オープン・スクールの教育効果を示しました。昨年全国1位となった広報紙は、今年もレベルの高い内容でした。

《佐藤審査員》

多数の人口規模を誇る市部の広報紙にも引けを取らない、紙面内容の充実ぶりと企画力を高く評価しました。特集タイトルの「磨け！わたしだけの個性」は、町村部における広報企画に携わる人々にとっての金言ともなりそうな、秀逸なコピーライティングです。



特 選

「広報おおぶ」2025年12月号 表紙 大府市



◇ 審査講評《鮫島審査員》

市内の公園で縄跳びを楽しむ子供たちを撮影した1枚です。縄跳びをしている様子が分かりやすいように、カメラを地面から見上げるように構えました。見上げるように撮影することで、縄跳びをしている様子が強調され、楽しそうな子供たちの表情がよく表現されています。また、公園が木々に囲まれている状況もよく分かりますし、木漏れ日が半逆光気味に当たって全体を柔らかく包み、子供たちを浮き上がらせています。見る人を引きつけるたいへん完成度の高い写真になっています。

特 選

「広報ちた」2025年10月号 表紙 知多市

広報ちた  
**Chita**   
— ちょうどいいまち —

**10**  
2025(令和7年) No.1396



◇ 審査講評《鮫島審査員》

毎年行われている「知多市民美術展」で市長賞を受賞した作者と作品の2枚の写真を表紙にしました。作品をいくつかのライトを用いて多方向から光を当てることで、より立体的に表現されています。また、作者は斜めから柔らかく光を当て陰影を作り出すことで、彫刻に没頭する姿が強調されています。2枚の写真のつなぎ目もうまくぼかしを入れて一体化させる工夫も素晴らしく、多くの人に美術展に行ってもらいたいという、撮影者の気持ちが強く伝わる写真になりました。

特 選

「大府市制 55 周年記念映像

『音楽のまち・バイオリンの里おおぶ』 大府市

(<https://www.youtube.com/watch?v=pPd88gLk7SM>)



◇ 審査講評《柴山審査員》

この作品は、大府市制 55 周年を記念して制作され、「バイオリン」を軸に大府市が「音楽のまち」であることを紹介しています。冒頭は、弦楽器などの産地で知られるドイツのマルクノイクルヘンの映像、そして「日本にも音楽とバイオリンのまちがあることを皆さんは知っていますか？」と始まります。続いて市内の盛んな音楽活動や、小学校でのバイオリン授業の様子が紹介され、「なぜ大府でバイオリンなのか？」という疑問が湧いたタイミングで、その背景が語られる構成が巧みでした。

大府市とバイオリンの関係で語られたのが国産バイオリンのパイオニアといわれる「鈴木政吉」であり、彼が大府に分工場を新設した経緯や、戦争による中断、そして戦後 76 年を経た市の誘致といった歴史が、ひとつの「物語」として描かれていて、全編を通して興味深く観ることができました。

演出面では、過去と現在を表現するためにアニメーションを織り交ぜていたり、生成 AI 技術によって写真から動画化された戦前の資料を使ったりと多彩な映像表現がありました。また、映像に合わせたバイオリンの音色が心地よく、さらに出演者兼ナレーターである俳優・清水くるみさんのナチュラルな語り口や飾らない表情も作品への没入感を高める効果があったのではないのでしょうか。

大府市が「音楽のまち バイオリンの里」であることが理解でき、視聴後に心地よい余韻が残るとても見応えのある作品です。